

受験番号

[]

氏名

〔

〕

二〇二四年度

女子学院中学校入学試験問題（国語）

一 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。 ※本文中の（ ）内の注は出題者による。

青森のある水田を、空から写した写真を見ていて、☆この田んぼで穫れるお米は、きつとおいしい、と思った。

だいいち田んぼ自体が手作りの感じである。それも相当不器用な手で、一つ一つ組み、並べ、継いでいったような按配で、あじわいがある。

①ここはもとともと狭い谷あいの村里ではなかったかと思う。平地というものはいくばくもないところを、少しずつ拓いて田んぼにしていたのではないかわれる。木立や茂みを残したりして、あまり自然に逆らわず遠慮がちなところがいい。

だから区劃（くかく）は入り組んで、②一望千里とはいかないが、ガラス絵のようにロマンチックでさえある。この③手作りのステンドグラスに囲まれて、④赤い屋根の家は、まさに「田守りの舎」とでも名付けたいたすまいである。こんなりとした木立に寄り添われて、田んぼと一体の親密な絵になっている。

田んぼはお田植え前で、きれいな水が張られているらしく、ア東北の空の色を映して紫色に緊張している。一つ一つの田が、それぞれの色合いの水を湛えているように見えるのは、それぞれ水の深淺によるのか、底の泥のたちによるのか、水も手作りの趣きなのである。

赤い屋根の下にも、お田植え前の緊張があるであろう。人々は、家々を行き交い、相談事もしているであろう。⑤空から見れば、それはお伽話の世界のことにように、地上的な現実を超えさせてしまう。

この田んぼを眺めていると、近頃は、田植えも機械化されているということをお忘れさせられる。イ一束一束、ひとひとが心を籠めて苗を植えつけるに違いないと、思われてくる。

私は戦争末期に東北地方に疎開していたが、雪の多い、冬の長いその地方で、夏前の季節、⑥人々の心がいちばん明るくひらくのを知った。ウ人々がいそいそと、お田植えの準備をしている様子は、我々よそ者の入場のない所であるが、⑦よそ目にも、楽しい張りに満ちた作業に見えた。

収穫までの⑧いちぢくしじゅうを、とにかく、すぐ近い所にいて知ることが出来た年、貰って食べたお米の味は今も忘れることができない。何というコクのあるごはんであったであろう。あまく、しっかりした味わい、その後東京住まいで、

どんな有名な銘柄のお米を食べても、⑨あの時の味には及ぶべくもない。あのあたりの田んぼも、継ぎ足し継ぎ足しの田んぼだった。エ曲りくねった畦道を、私も朝夕歩いた。やはり山裾の小さな村だったのだ。

だからこの写真を見て、☆「この田んぼはきつとおいしいお米が……」と真先に思ったのだ。

もし飛行機で⑩あのへんを飛んだら、深い色をたたえた田んぼが見えるであろうか。

（篠田桃紅『その日の墨』より「水田の写真に」）

問一 — ①「ここはもとともと狭い谷あいの村里ではなかったかと思う」とありますが、同じ意味になるものを次から選びなさい。

ア ここはもとともと狭い谷あいの村里だったはずなのに。

イ ここはもとともと狭い谷あいの村里であったはずがない。

ウ ここはもとともと狭い谷あいの村里だったのだろう。

エ ここはもとともと狭い谷あいの村里ではなかっただろう。

問二 — ②「一望千里」のように、「一」を使った四字熟語を以下に挙げました。解答欄の空欄に適切な漢字を入れて、読みと意味にあうように完成させなさい。

1 一ジツセンシユウ（とても待ち遠しいこと）

2 一シンフラン（一つのこと集中して取り組みこと）

3 シンキーテン（何かがきつかけとなつて気持ちが前向きになること）

問三 — ③「手作りのステンドグラス」とは、何のどのような様子を表現しているか、説明しなさい。

問四 — ④「赤い屋根の家は、まさに「田守りの舎」とでも名付けたいたたずまいである」とありますが、どのような様子ですか。最も適切なものを次から選びなさい。

- ア 美しく広がる田んぼに対して家が遠慮がちに寄り添っている様子
イ ロマンチックな赤い屋根の家が素朴な田んぼを引き立てている様子
ウ 赤い屋根の家と田んぼが一枚の絵のように調和している様子
エ 落ち着いたたたずまいの家が真新しい田んぼと対比されている様子

問五 — ⑤とありますが、

I 「空から見れば、それはお伽話の世界のことにように、地上的な現実を超えさせてしまう」とはどういうことだと考えられますか。最も適切なものを次から選びなさい。

ア 現実には人々が具体的な相談を行っているだろうが、空からではその様子うかがえず、何を相談しているのかおぼろげにしか内容がわからないということ。

イ 実際にはそこに住んでいる人々が現実的なやりとりをさまざまに行っているはずだが、空から見るとまるでそんなことは感じられず、幻想的な世界に見えるということ。

ウ 現実として田植え前の人々は深刻な様子であるが、空という大きな視点から見るとたんにささいなことに思われて、現実を超越した視野を獲得できるということ。

エ 実際の人々は田植え前に緊張感をもって生活しているが、空から見ると穏やかな光景が広がっており、その二重写しの光景がいかに物語的な世界を生み出しているということ。

II 本文中の波線部ア～エの中から、「ここでの「お伽話の世界のこと」にあたるものを一つ選びなさい。

問六 — ⑥「人々の心がいちばん明るくひらく」とありますが、どういう心情か、説明しなさい。

問七 — ⑦「よそ目」とありますが、ここではどういう人の視点か、最も適切なものを次から選びなさい。

- ア 疎開してきたために、田植えの作業には関わらない人
イ 疎開してきたために、その地域で仲間はずれになっている人
ウ 疎開してきたために、すぐそこを離れることになっている人
エ 疎開してきたために、初めて問近で田植えの様子を見た人

問八 — ⑧「いちぶしじゅう」の意味として正しいものを次から選びなさい。

- ア ある物事の始めと終わり部分の詳しい事情
イ ある物事の始めから終わりまでの中で一部の事情
ウ ある物事の始めから終わりまでのおおよその事情
エ ある物事の始めから終わりまで全ての詳しい事情

問九 — ⑨「あの時の味には及ぶべくもない」とはどういうことか、最も適切なものを次から選びなさい。

- ア あの時の味にかなり近いものがある
イ あの時の味と比較することはできない
ウ あの時の味とは全く違っている
エ あの時の味の方がはるかに良い
オ あの時の味よりずっと優れている

問十 — ⑩「あのへん」とはどこのことか、説明しなさい。

問十一 太線部☆「この田んぼで穫れるお米は、きつとおいしい、と思った」「この田んぼはきつとおいしいお米が……」と真先に思ったのだ」とありますが、筆者がこのように思ったのはなぜか、説明しなさい。

二 一次の文章を読んで後の問いに答えなさい。※本文中のへ～内の注は出題者による。

小学校低学年の頃、誰でも一度はするようにお気に入りのマンガ写しに夢中になった。

そのうち、写し遊びは主人公の顔を描いてから切り抜いて別紙に貼ったり、ペンとインクでオリジナルの野球や探偵物マンガを描いたりすることに変化していった。

学校のマンガ写しの得意な生徒グループにも潜り込み、時々誰かの家に集まって流行りのマンガ頁の写しつこをよくした。

そんなことを繰り返していたある日、①「形」そのものとは別に、そこに「感じ」といった感覚がふと意識の中に入り込んだ。

②「目置かれていた」一人の友達の描く形は、確かに比率が正確だということはあるが、内心自分の絵の方がよりマンガの雰囲気に近いと思った。③形と雰囲気には、必ずしも常に合体するわけではない微妙な関係がある、そんなことを感じた。あえて言葉を探すなら、形を覆う体温といった感覚だった。オリジナルに近い形に仕上がったとしても機械的な線の痕跡で終わることもあれば、若干歪な形でもオリジナルの感じに近く血の通う温かい雰囲気に仕上がるものもある、そんなことを感じた。

ヒョんなことから、マンガ写しは紙上から実用品へと移動していった。

海に向こうには子供用品にも無地のモノがあることを知ったのは当時放映中だったテレビ番組「名犬ラッシー」だった。その中では飼い主の男の子がいつも無地のバスケット・シューズを履いていた。新聞少年である男の子が配達先の玄関目がけ遙か遠くから芝生越しに八つ折りの新聞をまったくブツキラボウに放り投げ、スタンドのない自転車から降りる時は傷つくことなどおかまいなしに路上に投げ出し、大人と同じ無地のバスケット・シューズを当たり前前に履いてい

る。④それらはシヨッキングな出来事として心に焼き付いた。子供用既製品といえど、何かしら柄模様が強制的に付いていた時代、ブラウン管（ここではテレビのこと）から唐突に投げかけられた「無地」の発見と素っ気なく乾いた光景は、自分の中の「マンガ」に対する意識にもかなりの影響を与えた。

あまりに子供っぽすぎるキャラクター付き上履き入れや下敷きを毎日学校へ持ち運ぶ屈辱感は、カイロ用ベンジンやハサミを駆使してそれらを剥ぎ取って「無地」にし、マジックインキで好きなマンガを自分なりに配置して描くという呆気ない方法で一気に解消した。

ある日、クラスの女の子が⑤上履き入れに描いた絵を下敷きに描いて欲しいと言ってきた。それをきっかけに休み時間、希望の品を手にも並ぶ列が席前にでき、「ニュアンス」や「雰囲気」というものは他人にも伝わることを知った。稀に正確な「形」の上に「感じ」がうまく重なった時は言葉にしがたい快感を覚えた。「マンガ」と図工の時間の「絵」の間には、何か両者を隔てるものが横たわっていることを薄々感じ始めていた時期、「絵の賞」とは一体何なのか、不思議に思っていた。

各学校が選んだ優秀作品を区の図画工作コンクールに定期的に応募するといった仕組みだったのだろう、ある日の図工の時間、区主催の図工作品展示会場をクラス全員で訪れた。

展示会場は公民館のような建物内の一室が穴開きパネルで仕切られ、ところどころ台が置かれた場所で、そこに段掛けの水彩画や粘土等の立体物が学年の賞別に並んでいた。

選ばれた作品の右下には、筆文字で賞名の書き込まれた細長い金色の折紙が貼られ、一般の大人がそれら一点一点に見入り話している光景に、「絵」には教室以外の世界があることを初めて知った。

そんな中、同年代の見知らぬ生徒の水彩風景画を目にした時、⑥とんでもない

異物に出会ったようなショックを受けた。絵のところどころが出っぱっているような違和感を感じた。

画面四方の近景には大きな木の幹と葉っぱが描き込まれ、樹々の隙間から遠景の街並が見え隠れしていた。会場でその絵を見ながら思い浮かべる自分の絵は、少ない色数がペロツと塗られただけのニセモノにしか思えず情けなくなつた。

賞というものに結びつく絵には明らかにマンガ写し絵とは異なる大人の世界があり、自分とパネルの間にも目の前の遠近法の風景に似た⑦近くて遠い「距離」があることを感じた。

マンガ以外にどんなものをどうやって描いたら自分の絵が目目のパネル上に並ぶのか一生懸命考えてみたが、それまで学校からはコンクール用に一度も推薦されたことがないことに初めて気づいただけだった。

当時は余裕のありそうな家の女子はクラシックピアノを習うという風習があったためか、絵画コンクール会場の受賞作品には洋間に置かれたピカピカの黒いピアノのイメージがダブった。自宅六畳間のコタツにデンと乗った趣味を疑う朱色のデコラ板上のマンガの写し絵は潔く⑧旗を掲げていた。

その後一度だけ、コンクールの応募メンバーに選ばれ「花瓶と花」を描いた水彩画を提出したが、あつさり落選。しばらくたつてから、金色の箔押し文字で参加賞と捺された蜜柑色の消しゴム付鉛筆一本を放課後に先生から受け取った。手元のねぎらい鉛筆を眺めるうち、記憶の中の眩しい遠近法が浮かび、かえって貰わない方がよかつたと落ち込んだ気分になった。

中学に通い出した頃には興味を持ち始めた油絵具やカラーインクを使って、好きなミュージシャンやファッション雑誌の中の写真を元に相変わらず絵を描いていた。それは中学生版マンガ写し絵だった。部屋の壁にどんな絵が掛かっていたらカッコイイか、そんなことばかり考えながら絵を描いていた。

高価な専門用紙やキャンヴァスなどは頻繁に買うわけにはいかず、失敗した絵は、画用液で薄く溶いた何かしらの一色を何度も塗り重ねて均一にし、再びその上に違う絵を描いた。

ある時、画面全体に塗り始めた青色の透明液の膜を通して、絵の全体を眺めた。絵の表面に目をこらすと、元絵のさまざまな色に同一の青が重なり、予期せぬ新たな色がいっせいに浮き上がっているように見えた。斑模様の絵の中にはさまざまな距離が一瞬で生まれたようにも思え、その距離は小学校の頃見た水彩風景画の中の出っぱり具合を引き寄せた。

絵はどの地点から何度でもスタートしていいのだ、また、失敗地点は新たなスタートラインにも成りうると思った。あの日絵の中にふと感じた距離は、マンガの写し絵からしかたどり着くことのできない「斑模様の遠近法」だったと⑨腑に落ちた。

二〇〇八年二月

（大竹伸朗『見えない音、聴こえない絵』より「斑模様の遠近法」）

問一 — ①「形」そのものとは別に、そこに「感じ」といった感覚がふと意識の中に入り込んだ」とありますが、ここでの「感じ」と最も近いものを次から選びなさい。

- ア 内容を映し出して心に響く感じ
- イ 全体からなんとなく受ける独特の感じ
- ウ 自分の目で見た時にだけわかる感じ
- エ 周囲の人々から受ける抵抗しがたい感じ

問二 — ②「一目置かれていた」とありますが、「一目置く」の意味として最も適切なものを次から選びなさい。

ア 抜きんできた能力がある人を羨む^{うらや}

イ 相手の力を認めて気を遣う^{つか}

ウ 最も秀でている人を称賛する^{しょうさん}

エ 優れて^{すぐ}いる相手に敬意を払う

問三 — ③とありますが、「友達の絵」と「自分の絵」を比較し、「形」と「雰囲気」について違いがわかるようにそれぞれ説明しなさい。

問四 — ④「それらはショッキングな出来事として心に焼き付いた」とありますが、「それら」としてあてはまらないものを次から選びなさい。

ア 少年なのに新聞配達という仕事をしていること

イ 新聞を雑に放り投げるといふ配達の仕方をしていること

ウ 自転車^{あつ}を乱暴に扱って路上に投げ出したりすること

エ 少年が無地のバスケット・シューズを履いていること

問五 — ⑤「上履き入れに描いた絵」とはどういう絵ですか。最も適切なものを次から選びなさい。

ア 女の子の上履き入れにもとから描いてあった絵

イ 女の子が自分自身の上履き入れに描いた絵

ウ 筆者である「自分」が「自分」の上履き入れに描いた絵

エ 筆者である「自分」が女の子の上履き入れに描いた絵

問六 — ⑥「とんでもない異物に出会ったようなショックを受けた」とありますが、どういう点に「ショックを受けた」のですか。三十字以内で説明しなさい。

問七 — ⑦「近くて遠い「距離」があることを感じた」とありますが、どういうことですか。最も適切なものを次から選びなさい。

ア 賞を取るような絵はすぐに描けると思っていたのに、実際は簡単には描けず、厳しい世界だと感じた。

イ 賞を取った絵をすぐそばで見ているが、自分の絵との違いがわからず、とまどいを感じた。

ウ その絵の作者は同じ地域で育った小学生であるのに、大人びた絵を描いており、敗北感を感じた。

エ その絵は自分の目の前にあるが、自分には描くことのできない絵であつて、とうていかなわないと感じた。

問八 — ⑧とありますが、「 旗を掲げる」が「降参する」という意味になるように、空欄にあてはまる漢字一字を答えなさい。

問九 ―⑨とありますが、筆者が「腑に落ちた」ことはどのようなことか、最も

適切なものを次から選びなさい。

ア 自分なりの遠近感を持たせることのできた絵は、単なる偶然ぐうぜんによって生み出されたものであり、意図的に作り出そうとしても作り出せないものであるということ。

イ 遠近感のある絵を前に自分の絵は劣おとっていると思ったが、これまでたどってきた経験は無意味ではなく、独自の遠近感はその経験があつて生まれたものだということ。

ウ 子供のころに描いていた絵と今描いている絵は異なるものであつたとし、でも、すべての絵が経験となつて積み重なり、自分の目には遠近感が感じられたのだということ。

エ 失敗と思われていた絵からでももう一度塗り直して始めることによって、その失敗が生かされ、かつてあこがれたのと同じ遠近感のある絵にたどり着けたということ。

三 次のカタカナを漢字に直しなさい。

1 バスと電車がヘイコウして走る。

2 目でアイズを送る。

3 カテイと仕事を両立する。

4 米ダワラをかつぐ。

5 飛行機をソウジュウする。

6 シオドキを待つて行動する。

